

翻刻 市立米沢図書館蔵
『蝦夷恵曾谷日誌』 について (一)

A Complete Reprint of *Ezo Esoya-nisshi* Owned by Yonezawa City Library
(part.1)

山 本 淳
Jun Yamamoto

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第45号 抜刷

2018年3月

翻刻

市立米沢図書館蔵『蝦夷恵曾谷日誌』について（一）

山 本 淳

本稿は、標記資料『蝦夷恵曾谷日誌』（外題）の翻刻である。同書は、市立米沢図書館に「高橋しん家寄贈文書七」として収蔵されており、現在同図書館運営のデジタルライブラリにて、閲覧可能である(<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/FQ007.html>)。書誌情報をまとめれば、以下のとおりである。

○巻 数 三卷一冊（写本・原著）

○著筆者 濱崎八百壽（木麟・春溪とも、米沢藩絵図方）

○成 立 明治三（1870）年

○体 裁 縦帳

○寸 法 24.5×16.2 糎（縦×横）

○丁 数 97丁

○蔵書印 「高橋蔵書」

○内 容 米沢藩が支配の下命を承けた北海道磯谷郡（現寿都町）にて、藩士七名が現地調査を行った際の日誌であり、明治二年十月から翌年三月までを記録する。蝦夷地の風景や現地の習俗について説明し、自画による挿絵（彩色）を入れてある。

当該資料は、平成七年一月一日発行「広報よねざわ」の「郷土資料の散歩道」に紹介されているが、過去にも小野榮氏により『よねざわ豆本第六七輯 蝦夷恵曾谷日誌』として翻刻が試みられている。ただし、

豆本の翻刻では日誌中記事が省略されている箇所もあって、全体を見るのに些か不便である。このたび利用の便宜を図りたく、全文を翻刻すべく、巻ごとに分けて行う。まず、明治二年五月二二日の蝦夷地割渡の書（写し）から十一月八日磯谷に到着するまでの記録を内容に持つ第一巻を翻刻する。翻刻に際して、以下の諸則に従った。

一 なるべく原文に忠実に翻字することを旨とした。

一 原文の行に即して改行することとした。当該行に収まらない場合、二行あるいはそれ以上に跨ることを厭わず複数行で対応し、原文にて改行しているところでは、翻字文の当該行に余白があってもこれに倣って改行した。

一 細註箇所は、【 】に囲んで通常ポイントで翻字した。また、細註が三行以上に亘る場合、細註の改行に合わせて改行した。

一 原文改頁（半丁）に合わせ、末尾に『で区切って丁数、表裏（オ、ウ）を示した。

一 漢字については、正字体と判断されるものについては正字体で、画数の省略が著しいものについては通行の略字体で翻字した。仮名については、基本的には変体仮名を通用仮名（歴史的仮名遣いに採用されている字体を含む）に統一した。

一 特殊な合字については、「より」「コト」などと開いた。

一 特殊な繰り返し符合については、一の点を「ゝ」「ゞ」「ゞ」とするなど原態を尊重した。二の点は「々」に写した。また、クの字点は一律に「クク」とした。

一 ルビ(原文朱筆)については、右ルビと左ルビとが混在するが、右ルビは当該箇所直後に右寄せで()に括って小字で、左ルビは当該箇所の直後に左寄せで()に括って小字で示した。

一 見せ消し箇所については、修正後の表記を採用し、直後に「」で修正前の表記を二重取消線を加えて示した。

一 表記・解読上注意を要するものについては、適宜「」で説明した。本資料の姉妹篇ともいふべき別筆の『恵曾谷日誌』が北海道大学附属図書館北方資料室に蔵せられているが、こちらは見分隊長の山田民弥が筆録したものである。時を同じくして成った記録であり、こちらと対照させることによつて、明治初期北方地域見分の実態がより克明になるものと思われる。両筆資料の性格の差異については、拙稿「米沢藩士による蝦夷地見分日誌二種」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』43号・二〇一六にて、聊か卑見を述べた。

今回、翻刻をなすにあたり、本資料御架蔵の公益財団法人米沢上杉文化振興財団、ならびに関係各位に格別な御高配を賜った。また、本文解説に際しては、本学日本史学科小林文雄教授の御教示に与った。ここに記して、改めて御礼申し上げる次第である。

〈翻刻部〉

蝦夷恵曾谷日誌(表紙部・題簽)

此日誌は濱崎氏の書写せるもの

繪も濱崎氏

詩は吉田元碩の作

之と全じもの今札幌市役所に保存せらる(見返部・貼込紙片)

明治二己巳五月二十二日

公御参内之節御渡之御書附左之通

蝦夷地之儀ハ

皇国之北門直に山丹満州に接し径界粗定といへとも北部に至而ハ中外雑居致候處是まで

官吏土人を使役する甚苛酷を極め外国人ハ

頗る愛恤を施し候より土人往々我邦を怨離し

彼を尊信するに至る一旦民苦を救ふを名とし

土人を煽動するもの有之時ハ其禍忽ち函館松前¹オ

延及するハ必然にて禍を未然に防くハ方今の

要務ニ候間函館平定之上ハ速ニ開拓教導等之

方法を施設し人民繁殖の域となさしめらる

へき儀ニ付利害得失各意見無忌憚可申

出候事

五月

同七月中御布告左之通

蝦夷地開拓之儀先般 御下問も有之候通^ニ付

今般諸藩士族并庶民に至る迄志願次第^{1ウ}

申出候ハ、相應之地所割渡開拓被 仰付

候事

七月

同八月十五日御布告左之通

蝦夷地自今北海道と称し十一ヶ国に分割

国名郡名被 仰出左之通

渡島^{（ヲシマ）} 国 七郡 西部

亀田^{（カメタ）} 茅部^{（カヤヘ）} 上磯^{（カミイソ）} 福島^{（フクシマ）} 津軽^{（ツカル）} 檜山^{（ヒヤマ）}

尔志^{（ニシ）}^{『2オ}

後志^{（シリヘツ）} 国 十七郡

久遠^{（クトウ）} 奥尻^{（オクシリ）} 太櫓^{（フトロ）} 瀬棚^{（セタナイ）} 島牧^{（シマコマキ）} 壽都^{（スツツ）}

歌棄^{（ヲタシツ）} 磯谷^{（イソヤ）} 岩内^{（イワナイ）} 古宇^{（フルウ）} 積丹^{（シヤコタン）} 美国^{（ビクニ）}

古平^{（フルヒラ）} 与市^{（ヨイチ）} 忍路^{（ヲシヨロ）} 高島^{（タカシマ）} 小樽^{（ヲタルナイ）}

石狩^{（イシカリ）} 国 九郡

石狩^{（イシカリ）} 札幌^{（サツホロ）} 夕張^{（ユウハリ）} 樺戸^{（カハト）} 空知^{（ソラチ）} 雨龍^{（ウリヤウ）}

上川^{（カミカワ）} 厚田^{（アツタ）} 濱益^{（ハマ、シケ）}

天塩^{（テシホ）} 国 六郡

増毛^{（マシケ）} 留萌^{（ル、モツ）} 苫前^{（トマイ）} 天塩^{（テシホ）} 中川^{（ナカ、ワ）} 上川^{（カミカワ）}^{『2ウ}

北見^{（キタミ）} 国 八郡

宗谷^{（ソウヤ）} 利尻^{（リイシリ）} 禮文^{（レフンチリ）} 枝幸^{（エサシ）} 紋別^{（モンヘツ）} 常呂^{（トコロ）}

網走^{（アハシリ）} 斜里^{（シヤリ）}

膽振^{（イフリ）} 国 八郡 東部

山越^{（ヤマコシナイ）} 虻田^{（アフタ）} 有珠^{（ウス）} 室蘭^{（モロラン）} 幌別^{（ホロヘツ）} 白老^{（シラライ）}

勇拂^{（ユウフツ）} 千年^{（チトセ）}

日高^{（ヒタカ）} 国 七郡

沙流^{（サル）} 新冠^{（ニイカワフ）} 静内^{（シツナイ）} 三石^{（ミツイシ）} 浦河^{（ウラカワ）} 様似^{（シヤマニ）}

幌泉^{（ホロイツミ）}

十勝^{（トカチ）} 国 七郡^{『3オ}

廣尾^{（ヒロヲ）} 當縁^{（トウフチ）} 大津^{（ヲ、ツ）} 下河^{（シモカワ）} 河東^{（カトウ）} 河西^{（カセイ）} 十

勝^{（トカチ）}

釧路^{（クシヨロ）} 国 八郡

白糠^{（シラヌカ）} 足寄^{（アソヨロ）} 釧路^{（クシヨロ）} 善報^{（センボウ）} 阿寒^{（アカン）} 網走^{（アハシリ）}

川上^{（カワカミ）} 厚岸^{（アツケン）}

根室^{（ネモロ）} 国 五郡

花咲^{（ハナサキ）} 根室^{（ネモロ）} 野附^{（ノツケ）} 標津^{（シヘツ）} 目梨^{（メナシ）}

千島^{（チシマ）} 国 五郡

国後^{（クナシリ）} 擇捉^{（エトロフ）} 振別^{（フレヘツ）} 紗那^{（シヤナ）} 藥取^{（シヘトロ）}

已上^{『3ウ}

同九月八日辨官^江 御願書左之通

今般専ら蝦夷地御開拓御注意被為在候趣奉

伺候^二付而者諸藩追々奉承嘆願の趣実以臣子

至當之儀与奉存候此際奮發萬分の一奉報御国

恩「急力？」度心得罷在候處兼而窮迫之国柄用度必止与

差支窮民救助の道無覚束當惑仕候折柄 敢而

奉願候国力も無御座候得とも何れか微力を尽し

奉裨 御大業の萬一度素意御汲察被成下国力

相應之地所御割渡被成下候ハ、難有奉存候此段^{4オ}

不顧多恐奉歎願候 已上

明治二巳九月八日

米澤藩知事

弁官御中

同九月十五日弁官御役所^江 公用方御呼出多久少弁殿
御書付御渡左之通

米澤藩

後志国磯谷郡之内後別川西【但ノツトを以て境界とす】
右其藩支配被 仰付候事

九月

御印

太政官^{4ウ}

北見国之内 宗谷 利尻 枝幸 三郡 金澤藩
十勝国之内 當縁 廣尾 河西

日高国之内 様似 浦川

五郡 鹿児島藩

十勝国之内 十勝 大津 下河 河東

四郡 静岡藩

北見国之内 斜里 網走

二郡 名古屋藩

全 紋別

一郡 和歌山藩

根室国之内 目梨 標津

二郡 熊本藩

北見国之内 常呂

二郡 廣島藩^{5オ}

釧路国之内 網走

〔^{5ウ・6オ} 北海道略図（略）〕

後志国之内 久遠 奥尻

二郡 福岡藩

石狩国之内 樺戸 雨龍

四郡 山口藩

天塩国之内 増毛 留萌

膽振国之内 室蘭

一郡 ^仙石川源太

全 幌泉

一郡 ^全片倉小十郎

後志国之内 太櫓 瀬棚

六郡 兵部省

膽振国之内 山越

一郡 庄内藩^{6ウ}

釧路国之内 白糠 足寄 阿寒

膽振国之内 虻田

一郡 五島銃之丞^{7オ}

後志国之内 磯谷郡之内 後志川東 但川属之

〔^{7ウ} 白丁〕

明治二巳巳冬十月二日蝦夷御割渡之地^江 出張

被仰付同月九日米澤發足同十七日酉ノ上刻

東京飯倉御邸^江 着否^{（即刻）} 横濱港御用達

鈴木保兵衛方より飛脚到来書翰左の如し

三時を以啓上仕候寒冷之節益御壯健被為在御
坐奉恐賀候陳者先達而函館行蒸氣船

御問合ニ付早東聞合鈴木平吉方まで通達仕候間

定而平吉方より委細申上候事と奉存候然處^{8オ}

異人方俄に函館出帆ニ相成旨壱人より申来候一体

に而月末出帆ニ相成都合之需何故か明後十九日

早天出帆ニ相成候趣御座候就而者

且那樣方御乗船之義如何ニ御坐候哉余^リ急

場之儀故御見合被遊候哉亦御乗船ニ相成候哉

此段御伺上候若御乗船ニ相成候ハ、明昼迄ニ

御出港可被下候御廻状等之都合も御坐候間

是悲午ノ刻迄ニ御出港可被成下候甚御手数

恐入候得とも右御乗船ニ相成候ハ、今晚中^{8ウ}

何卒飛脚便にて御文通可被成下候夫々御掛

之方^江相届け置不都合無之様御取量奉申

上候間宜御承引奉願候御乗船御見合被遊候ハ、

御文通是又御見合可被下候先ハ前条函館

行蒸氣船御注進奉申上候何卒

且那樣方可然御披露之儀偏ニ奉願上候 恐

惶謹言

十月十七日午之上發三時限り

横濱本町三丁目

鈴木保兵衛^{9オ}

斯而次第にてハ甚火急也しかし此期をのかし

後の便船を待ち追々寒氣に廻り北海

ますク穩かならず是悲明日出港可然乍

去于今荷物ハ壱箇も不着今宵ハ必千住迄

来たらん急き飛脚を以通夜に繼立可来由

荷宰領^江手紙をつかわし明曉出港^{ゴウ}之方^ニ決

し各其用意をなす然るに今般蝦夷渡

海の人数拾四人之内半減必用之役七人出張之

方に變評「轉力？」し弁官御役所^江御伺書左之通^{9ウ}

山田民弥

真野寛助

入澤傳右エ門

吉田元碩

下村恭助

濱崎八百壽

外家来壱人

荷物式箇

兩掛壱箇

右者今般御割渡之蝦夷地為請取差遣度候處^{10オ}

便宜之外国船明朝出帆ニ付相雇ひ為乗組差遣度

存候此段奉伺候已上

十月十八日

米澤藩

杉山盛之進

弁官御役所

同十八日晴朝餉否飯倉御邸を發し芝口一丁目

馬車會所【元松坂屋と云太物店也しか當春より馬車會所と成し由表に官許馬車會所と金看板あり】

役人^江 掛合馬車三臺を雇ふ【自東京横濱まで一車金六円なり】

第一番車【御者耆人山田惣轄】後乗ハ【吉田氏予】二番車【御者耆人真野氏】後乗【入沢氏下村氏】

三番車【御者耆人山田氏】いつも紅白の旗を建て車飾極美也^{10ウ}

【馬ハ太く逞しきを撰ひ蹄に鉄轡をはめ馬面に

皮をあてゝ左右を見せず只行先を真直に見せしむ】各乗組車を

引出す頃已ノ中刻也御者一聲をはなち皮鞭を

加へ馬車宙を飛か如く馬ハますゝ駄とも名にあふ

東海道平かにして少も不轟高縄手品川駅鈴か

森鮫洲茶店小休馬に水飲【但茶店へ不入車上にて休息す少女

茶菓子一盆に載せ車上^江 指出す】

川崎駅六郷川舟渡し【舟渡し山坂ハ下乗すへし】萬年屋昼餉

【此宿^ニ 而馬次】暫く休息し又車を早め靄見生麦村小休

神奈川駅押分右ハ東海道路ヶ谷左ハ横濱街道也

新田間橋石崎関門野毛橋を過ぎ吉田町関門外^{11オ}

【^{11ウ}・^{12オ} 挿絵・狂詩(略)】

竹田屋某と云茶店^江 着す未下刻也自東京横

濱迄八里二時にして至る馬車のはやきコト可

恐此處関門有鑑札なきもの通行不許【但民家帯刀のもの斗り

町在の商人ハ無列往来勝手次第】此度急邊の出張故印鑑ハ跡より爰迄送る方^ニ 而暫く相待其内真野氏山田氏予

三人脱剣にて商人にまきれ関門を通り吉田橋

を渡り本町三丁目鈴木保兵衛を尋ね彼もの案内

にて海岸通船宿河内屋新兵衛^江 着す残の人数

茶店に休息之内飛田喜左衛門早馬にて印鑑を^{12ウ}

持来り無滞関門を通り同しく河内屋を尋ね着す

于時申下刻也かの新兵衛と云もの俠客体の男也

門前に【長崎兵庫函館新潟】飛脚蒸氣船乗組所と看板を掲ぐ今度

米澤定宿之願故許之吉田氏筆にて墨黒に

尽し同表に掛る夕方鈴木保兵衛本宅^江 招かれ

楼上にて種々饗應有り【本宅ハ海岸通五丁目に有家居

巨大美目を驚かすまた

出入もの多く極而富商なるへし】西ノ下刻旅宿^ニ 帰る濱屋官助来る

【此もの元米沢下永井小出村

油屋孫助か弟なり】昨年戦争以前ハ横濱にて

相應の商人なりしか奥羽合戦之節米澤者故^{13オ}

彼是うたかへを得大に不都合になり今ハ漸く片

涯に住居のよし此者案内にて新吉原夜店の

賑ひ岩亀楼まで見物す抑横濱の繁栄両京^ニ も

勝り東に外国館百七十五番有山の頂にハ英佛の

軍衛あり南に新茅原妓楼有西ハ神奈川臺山々

絶景也北ハ日本第一之大港^ニ 而五大洲の商船軍艦

ホマイ蒸氣取合七拾三艘【當今港掛の船数也】其余倭船小舟

挙て難計又自横濱東京迄半丁隔に二丈余の柱を建て一條の銅線を引き両地の急変并交』¹³⁾易相場の枉直を通すテリカラス（テンシンキ）と云【エレキテールの類なる歟】此

仕掛ハ當時仮にて後にハ海底^江仕掛と云同十九日

晴朝餉否吉田氏と外出弁天通桂屋喜助を尋ね

【国の新かつらやの同家也】彼喜助か案内にて外国館に至る其奇美言語に難述数軒見物畢而南京酒楼に上り第一閣に至る席にハ五彩の毛氈を布き中央に大なる

盃机を置き周囲に曲禄を列ね天井にハ珠玉にて

飾たる燈籠有傍に観容鏡を掛けにも
美事なるハ四壁の書画なり多くハ四君子』¹⁴⁾

花鳥書ハ古今の名詩文章楷書八分字或ハ

行艸何れも能筆なり額ハ大白楼【埜江奕栖題】行書

にて甚美事也右第一閣之額ハ大字ニ而聊以自娛

二閣ハ草書にて停雲【龍卷尽】の額第三額面は

杏花深露【態景里題】第四亦^{（題）}以暢叙幽情【横額六尺余】

左り第一對酒應歌此額行書也第二從吾所

好第三詩酒情怡【丁本蒲自慈幽題】第四餘□閣【少蒲羅憚策】

第五蓮幽閣【左文字】に入り婢女を呼ひ茶を命し

曲禄に倚り休息す少く有て奈良茶碗ニ茶を』¹⁴⁾

もり湯を汲み別に小茶碗を添持来る菓子ハ鶏卵

麦製或ハ胡麻製蒸菓子なり厚京焼の皿に三ツ宛、

盛り大なる盤に載^{（て）}せ差出す茶の喫やうハ【奈良茶碗を蓋のまゝ

傾け小茶碗^江うつし飲也】菓子ハ少し腥けれども甘く味よろし又婢を呼ひ酒肴を問ふに酒ハチン酒蘭陵其外数品有肴ハ

牛鱸鶏の羹豚蕎麦有と云然らハ其豚蕎麦早

速出すへしと命し待間もなく大なる陶器鉢^江

盛り紫檀の箸を添白銀の酒瓶に菊形の小猪口を

持来る酒ハ【焼酎に砂糖を加へしものなるか】豚蕎麦ハ

【倭^{（て）}の干鰯鮓に似たり豚肉を交せ同油にて煮砂糖をかけしもの歟』¹⁵⁾

甘味にて腥けれども腹中温りてよし必可食もの也

是より楼を下り門口に南京人机に倚り十露盤を

扣ひ酒料を取収む價何程と問へハ【清人のこと葉】「日本ヨロシイ

貳分ト天保三」とこれのミ予か耳に入りしか其外言語少も

わからず爰を立出南京青物店に至る莫瓜柚荅

枝【何れも倭物よりハ大なり】其果種々不知品多し彼荅枝を求ん

とて頻りに價を問へとも一切不通終に雙方大笑して去

此日吉田氏横文字を書たる笠をいたゞき戎装にて

有けれハ往來の異人かの笠を指し文字を読笑ふて』¹⁵⁾

往過るも有又傍に寄り肩に手をかけ何やら語り

去もあり甚興を催し自是海岸^江出未下刻客

舎に帰る

山田民弥

士分五人

供者人

荷物貳箇

両掛壹箇

右者魯国蒸氣コーリル船乗組函館迄罷越度
段願之趣承届もの也

已十月

神奈川縣 裁判所印^{16オ}

自横濱函館迄船賃二拾二トル半七人にて百五拾四トル也
異人より指出す請取書之写

〔写し(略)〕^{16ウ}

同日申下刻鈴木桂屋濱屋等か世話にて船中の食料

【パン 南京漬物 柿 蒸菓子 茶 梅干 佃煮 鶏卵 酒 飯 水】

取調ひ小舟二艘にて荷物を

運び蒸気船^江乗うつる頃已に黄昏に至而出帆之

儀船長に談す【魯西亜人の辞】「日本ヲハヨウヨロシイ出帆延引^ク

明二字^ク」と云斯而ハ甚不都合荷物ハ皆式積込今

更上陸もしかたし亦舟中ハ石炭積にて塵埃掃

除不済内ハ坐すへき處もなく其上食物貧しく

多人数船泊なりかたく吉田氏山田氏予三人舟泊し

余ハ皆舟宿^江引返し翌朝又乗込方^ニ決し^{17オ}

多「他」の四人暗夜に小舟^ニ而上陸し河内屋^江一泊^ス

抑此船魯西亜四百七拾六番蒸氣コーリル

船と云長^サ三拾七八間幅八間帆柱二本車臺砲一

つ蒸気筒壹本【但中車なり】端船^(ハッテラ)式艘中段にハ割

烹所食堂異人部屋数所有異国人七八人南

京人十人程亦乗合ハ紀州商人横濱商人【酒四百樽程】

東京同【酒三百九拾樽程】宇津宮同【太物類】東京同【太物小間物
此者元會津の藩なるか真野氏見覺有しと云】長崎通辞長吉倭「傍力？」
の少女【年齢二八斗

銀杏鬚異人の妾なる歟】我等居間ハ拾疊敷程三方に臥床有^{17ウ}

真中に食餌を載る円架を設け傍に観容

鏡劍附ミニー筒七挺其他色々飾有美美

筆紙に尽しかたし夜中ハ数十の燈籠有

舟中ハ白松脂^(チヤン)塗にて照輝き白中の如し同

二十日晴早朝多「他」の人数も乗組み出帆を待処

午之刻より一天曇り申ノ下刻微風細雨夜

戌ノ刻頃より頻りに石炭を焚き蒸氣烈敷立

登り忽ち車輪の聲如雷船中に響き横濱

出帆する時亥上刻也伊豆下田銚子の鼻を^{18オ}

〔ウ・19オ 挿絵・狂詩(略)〕

廻る頃より雨頻りにつよく大風逆浪起り

船は追々動揺し窓より折々浪を打込ミ乗

合の人物炮烙にて豆を煮る如く悉く轉倒し

或ハ吐或ハ尿をもらし何れも冷汗を流し嘔吐

舟中に衆「充力？」ち臭氣甚し同二十一日二十二日二

十三日半死半生にて一切不相分同二十四日天氣

快く晴れ海波至而穩也漸く人心地つき船

上に出て四方を詠むれハ右に南部の山々手に

とる如く見え渡り右ハ東海茫渺として天に^{19ウ}

連り北に白を帶たる山々霞の如く是こそ

蝦夷東岸の山也と漸く意も快然たり舟上

には櫓を構ひ時計を仕掛磁石をすへ車を廻し

楫^{（カネ）}を取有亦船頭の居間にハ寒暖計風雨計いろク

の書物等多く有れとも皆横文字^ニ而読かたし

又傍に舟大工の端舟^{（ハツテラ）}の破損を補ふ有金道具

并働さま甚奇也【倭の大工ハ鋸も鉋も引て切ものの成に

異人ハ左に非す向へ^江おしてつかふ也】

舟士等柱に上り帆を掛巻するに履の傳繩階

子を上り苦惱なく働さま宛も猿の如し^{20オ}

惣而役せらるゝものハ南京人多し予異人に向

ひ函館^{（ハコタテ）}ハ何れの辺なりと頻りに尋しかとも

互に言語不通しかし函館と云コト異人の耳へ

入しにや予か袖を曳き船かしらに立せ後に

廻り予か首を両手にて押ひ真直に西北の方を

見せしむおかしくも又深切なり傍に遊居し

女子菓子を送る其形ち繭「雇」の如く滑にして紅

と白と有光澤玉の如し食時ハ少し臭けれ

とも極甘し後又苦し嚙碎き見れハ中に菓^{20ウ}

實有【桃仁なる歟】魯亜製なるよしこれ等に氣をなく

さむる内漸々海せはまり南部と渡島^{（ラシマ）}国との間

入江にて浪平か也【但潮三筋有難所

なれとも蒸気船^ニ而渡れハ甚安し】申下刻

函館港^江着船す繩を以海底の浅深を測量し

碇を卸し蒸気を拂ふ其氣海面^江横たわり

濛々として霧の如く四方見えず船止る否外国館

また泊舟の異人諸方より端舟を飛し彼着船^ニ

乗移り手を取て互の無事を怡にや何やら語り

合自横濱の書翰と見えて封書数通請取^{21オ}

去る續而運上所役人【袴羽織にて二人】日の丸の旗を建し

小舟にて来り乗合の人数且荷物を調へ勝手に

上陸不苦旨相達す此時日己に暮俄に雪風

起り寒氣肌を浸し始て氣候の異なるを覺

ゆ小舟を雇ひ荷物を積揚げ上陸し運上

役所并裁判所^江届け町會所より御用宿を

申付る内各舟中四日か間絶食同様にて寒飢^ニ

迫り歩行なりかたく海邊舟士ともの小屋^江

入り茶湯或ハ彼等か残食を乞ひ燃火にあたり^{21ウ}

寒さを凌ぎ少しく力を得間もなく宿の案内

来り大町通萬屋仙右衛門^江泊于時戌の上刻也

於是味噌汁温酒飯を得互に蘇^シ生せし

心地して船中無難の怡を述へ笑聲暫く

も不止自横濱函館迄海上四百余里

蒸気船心得

一 船中蒸氣のために甚温し折々船上に出て仰

に臥し熱氣を拂ふへし【但四方を詠むへからず波

濤に恐怖し眩轉する也】

一 食物ハねはきもの喰かたし梨子蜜柑鶏卵^{22オ}

〔22・23オ 挿絵・狂詩（略）〕

茶梅干惣而水菓之類よろし

一 白木綿にて腹を巻き船なりに臥てよし横に伏せハ必嘔吐す

一 尿置吐置の用意ありてよし

一 船中の水大に悪し石炭の香移りて飲かたし清水の貯へし

同二十五日晴寒風烈し町役人案内にて下宿を

替へ芝田屋傳兵衛^江 四人三浦屋文蔵^江 三人止宿す

午下刻当地の醫師柏倉忠肅来る此もの元羽の²³⁾

前州村山郡柏倉之産にて久敷米澤堀内家

に寄宿其後諸方流浪し当今函館住居のよし

吉田氏舊友なりと云午後市中見物す

一 函館ハ此地出成のものにて多く諸国の出店或ハ

脱走欠落ものゝ集る處にて法外高利を貪る

奸商いつれ一節有人物にて性直のもの稀なり

当国随一豪便「？」之地にして富家多し乍去当

春戦争に民疲れ賑しからず南に葉師山御殿山

あり山腹にハ妓楼定芝居外国館数軒あり東に²⁴⁾

舊幕の奉行堀織部正竹内下総守か築きし五大

州第一の臺場有西に立松山大森濱北ハ入口にて

船掛極よろし蒸気ホマイ船取合十五艘程和舟ハ数ひ

かたし弁天岬海岸に破船の焼たる有此舟脱走方幡

龍と名つけし蒸艦にて脱走没落之時自ら火を放

ち焼捨しと云に今蒸気筒同車而已残り見ゆ此日

宿の丁稚か案内にて芝居^江 行一幕見物す【外題ハ忠臣後日文章

孝行酒屋孫兵衛傾城敷妙身受之段悴弥平親父^江

寝言にて異見するところなり】申下刻旅宿に

帰る磯谷請負人佐藤栄左衛門来る此もの元奥州伊²⁴⁾

達郡飯坂之産^ニ而【飯坂町佐藤半七とて酒屋也と】松前城下枝ヶ崎町に

住居当時會所町枿屋重三郎^ニ止宿【枿屋と云ハ彼栄左衛門か出店なり】

磯谷郡土地人民産物運上等を委細尋問【蝦夷場所請負人と云ハ

松前函館辺の臣「巨」商魚獵多き場所を見立運上家を立出張し土地の

ものゝ家作をはしめ米噌漁具に至る迄一式引請金銭を出し魚漁を以

取立大利を貪り平生ハ支配人と云を立置き右場所^江 遣し萬事

世話致させ彼ものにまかせ置なり】

一 開拓役所ハ葉師山之半腹裁判所と同局なり長^{チャウ} 官有

東久世宰相殿其他出張の役人多し茲^ゴ に米澤藩

荒井藤次郎一昨年脱藩し諸国遊歴し此度開

拓権小主典置賜英一と改め當地出張也下村氏²⁵⁾

元同郷故下宿を尋ね面會し我等旅宿まで招請

磯谷請取方且請願伺等萬事不案内故宜敷頼入

同二十六日曇天辰ノ下刻より風雨当地の張師を尋ね

美濃紙簪沙をなす此もの少々画をかき亦初学指

南の札をかけ筆子五六拾人あり夜亥ノ刻頃より雨

雪に變し風尤烈し東雲に至り積雪一寸同二十

七日寒風街道凍る砥の如し爐邊茶盆の滴水

氷と変す屏風にかけし手拭板の如くに氷る

申ノ下刻置賜氏に招かれ華楼に上る此楼山の²⁵

半腹^ニ而眺望至而よろし酒半酣にして藝妓来

り諸国方言歌を唱ふ左にしるす

蝦夷方言

「ヒリカ^{（ヨイ）}。メノコト^{（女）}。トナセノ^{（二人）}。モコロ^{（ネル）}。ニシヤタ^{（アスハヤ}

ク。ハチコロ^{（カラス）}。チ、コーチ^{（チイテキタ）}。

和解 すいた女と一所に寝たら 早く烏か鳴て来た

南部方言

「タンヘコ。テコヤアリヤ。ワイハイトツテン。フチマケタ。コーレハ。

ケシ

カラナアイ。ケライナ。フトコタ。サアッ

譯 男根^江手をやれハヒックリ仰天した 是ハけしからぬ嫌な人た²⁶

終夜興不尽戌下刻旅宿に帰る風静にして積雪

五寸余同二十八日雪晴早天置賜氏下宿^江ゆき昨夜の

失敬謝罪す午後外出海岸を逍遙す未下刻より

雨降置賜氏より使者来る日暮より夜請取来由要用

ありて不行同二十九日晴天雲^{（クモ）}なし朝磯谷支配人

信野祐蔵来る【此もの生国越前】磯谷出張之日限を談す来月

二日と決す夜中置賜氏を招き盃を汲む十一月朔

日雨天氷解て道路悪し巳ノ刻より雪に変し

寒気も亦強し同二日雪風支配人祐蔵を案内と²⁶

して函館を發す置賜氏并佐藤萬兵衛榊屋重三郎

等郭外迄送る【蝦夷街道の川々皆荒川^ニ而橋かけかたき故にや大体

歩行渡りにて甚難義なりよつて馬にて往来す

へし馬ハ皆野飼にて七疋或ハ拾疋を一連とす其内に先頭馬有馬士是^ニ

跨り綱を以て鞭にかへ頻りに聲をかけ駈行に餘^{（マ）}り馬悉くあとに隨

ひ

同じく駈行コト妙也【第一先頭馬々士これに乗り案内す身に熊の

皮を着し綿入の小手を差し首に風呂敷をかふり【惣而当地の男女

風呂敷をかふり帽子にかゆ

若き女ハ唐さらを用ゆ美也】二馬支配人祐蔵三吉田氏四山田氏

五山田惣轄六真野氏七【木】入沢氏八【世】予九【木】下村氏十【丸】祐

蔵か

召仕外^ニ荷馬三匹何れも【木】鳶毛團を着し蝦夷帽子

【藁^{（ワラ）}の如き草にて造る国の簑^{（ミ）}帽子に似たり】

或ハ坂田帽子をいたゝき足にハツマコ【国のデンベイに似たり】²⁷

ゴンベイ【国の手の簑かへしつまかけの類也】を履き馬を早^{（ハヤ）}めて

ゆく程に函館^{（ハコタテ）}

町はつれ右ハ桔梗野^{（キキヤウノ）}左ハ海邊也亀田^{（カメタ）}五稜閣七重濱^{（チ、エハ}

マ

此辺左戰場胸壁之跡大砲車軸を碎れ或ハ火門^江針

を打込み溝^江投捨たるも有陣笠桐油杯の破れ四方^ニ

散りて往来の馬蹄にかけられ又沖にハ蒸氣の破船

海底に沈みわつかに帆柱二三間程見ゆ此船長州の軍艦

なる由当五月七日の戦争に脱走方幡竜と名つけし

蒸氣船より打出せし大砲只一發にて彼船の砲門^江打

込れ弾薬に火移り一同に發動し無三なる哉三百余の』^{27ウ}

〔^{28オ}挿絵・狂詩(略)〕

兵船と、もに微塵にくたけ海底に沈し由此時脱走
方軍艦ハツヨタ丸開天丸大甲丸蟠龍四艘也と官軍ハ
軍艦多き内惣鉄丸と名つけし天下随一の船有脱走彼を
奪わんと頻りに策をなせしかとも運拙く終に乗取かね
亀田五稜閣にて悉く滅亡す此時人見勝太郎の詩
あり左に記す

幾萬官兵海陸来 跡軍場戦骨成埋

百籌運尽到今日 好作五稜郭下苔

コフキ濱一本木^(イツホンキ) 追分左ハ松前^(マツマイ) 街道有川^(アリカワ) 江出右ハ

大野^(ヲ、ノ)』^{28ウ}

道チヨタ此辺少々田地有とも不実只牧馬に食る、

而已ヤチ川大野^(ヲ、ノ) 駅會所平田嘉六泊【自函館^(ハコタテ) 五里戸数

百二十】于時

申下刻也此日非常之寒風にて身體凍て不動馬士^ニ

抱れ爐邊^江 行焚火にて暫く当り漸く人心地つき

匍匐して坐敷^江 ゆく終夜雪風不止至東雲積

て尺余同三日晴風烈し辰上刻馬にて出立ホンコウ

一ノワタリ此辺泥深く道悪し、峠^(トウ)の下^(シタ) 右ハ本道茅^(カヤ)

部^(シ) 峠左ハ新道ムサ峠と云【新道ハ半リ斗リ 近く道よろし】峠峯より

顧れハ函館薬師山画く如く絶景也又下り口より』^{29オ}

駒^(コマ) ケ岳^(タケ) 内浦^(ウチウラ) 岳大沼^(ヲ、ヌメ) 小沼^(コヌメ) 【小沼ハ取はや氷

海也】見ゆる蓴菜沼^(シンサイヌメ) 氷

厚^サ五寸余も有りと云此處にて本道^江 出會なり

シユクノツヘ茶店壹軒有昼餉暫く休息赤川^(アカ、ウ) 焼山^(ヤケヤマ) 此

邊左右木立【檜櫟之類多し】道平かにしてよろし艸ハ野菊

蓬虎杖^(トウクイ) 【大なるハ二丈ヨ太^サ一握に

あまる】押分右ハヲシラナイ道右ハ鷺木^(ヲシノキ)

ミチ也森村^(モリムラ) 自是海辺^江 出る蝦夷東岸といふ鷺ノ木^(ヲシノキ) 駅

山本屋泊【自大野^(ヲ、ノ) 八里七丁戸二百余】于時申中刻也寒風骨に透り

身体しひれて歩行成りかたく漸く爐邊^江 はひ上り

燈火にて人心地つきぬ爾し昨日よりハ快し此宿に火燵有』^{29ウ}

昨年十月脱走兵此宿に船を着け上陸し茅部^(カヤ) 峠

を越大野^(ヲ、ノ) を乗取直ちに函館^(ハコタテ) 江 押寄しと也脱走頭ハ

江本和泉松平太郎人見勝太郎大鳥敬助横津

清次郎等也何れも舊幕の臣なる歟同四日曇空

微雪半日歩行す海辺より詠れハ駒^(コマ) ケ嶽^(タケ) 遠く白^(ウス)

モロランの山々煙の如くミへわたり景色いわん方なし

晴天にハ後別^(シリヘツ) 山も見ゆると云海老屋^(エヒヤ) コタン何れも漁沙也

此邊海風烈しき故家毎に虎杖からを以て風除け

をなすカラアカイ干サメ多し高き竿にかけ風雨に』^{30オ}

〔^{30・31オ}挿絵・狂詩(略)〕

かまわす干置なり鳥除けの網を掛け宛穢多の

獣皮を枷すか如し【此アカイカスへの漁は十月十一十二迄なり

来三月迄に干上ると云】

また所々に火釜鍋有鯉或ハ雑魚をたき油を製す

といふニコリ川石倉^(イシクラ) 此辺^ニ 而氷に似たる石を拾ひ得たり

【水晶のわかきものなる歟】左リハ氷岸瀧水凍て氷箏となり寒氣甚しモナスへ此村^ニ而始て口の辺^江入墨したる婦^{メノコ}を

見る所謂土人^{アイノ}の妻^{メノコ}なるへしといとめつらしヲトスへ駅

昼餉馬次ヲトスへ川水涸れ^{カレ}て馬にて渉るノタイ川

前同断ユライ山越内^{ヤムコシナイ}中屋寛吉泊【自鷲木^{ハシノキ}五里半

戸百余】于時³¹

申ノ下刻也昔此宿内地^{シヤモ}と蝦夷^{エソ}地の堺にて柵を結び

往来の切手を改しと云此辺まで所々に松杉少々

有是より奥ハ松杉一切なし同五日積雪二尺余雪

吹にて馬不来滞留す【蝦夷の馬悉く山に飼置也牧場までハ

二三里も有と云雪風にハ迎も引来るコト難し】

馬鈴薯^{チヤカタライモ}【コシヨウイモと云也】小栗の名物也味ひよろし惣

而蝦夷

地ハかの馬鈴薯【国の九州芋なる歟】を以糧と為し命を續く

もの多し【彼いをもよく煮て皮を去り礮^{スリハチ}にてよく

すれハ羽二重餅の如くになり至而美味也】家毎に二三

拾俵ツ、も貯置と云此宿本名栗多沢^{ヤムクシナイ}と云むかしより

栗の沢山なる所なるへし同六日雪晴風烈し³²

早天馬来り卯上刻出立サカヤ川をわたりユウラツフ

大川也【巾三十四五間】舟渡し也此處土人^{アイノ}多し何れも

髪を冠り髭も剃らず形容鬼人の如し榆皮^{アツシ}の

半天を着し脚絆をかけ膝より腰まで素肌なり【アツシと云ハ

榆の皮^ニ而織し布也】獵に出る所にや網をのせし舟を漕出す

其棹歌何やら一切わからねとも大勢聲を揃て唱ふ

甚おもしろし土人^{アイノ}の寒氣^{シハレ}を不恐コト妙也黒岩^{クロイワ}

駅昼餉馬次海中に黒牛の臥たる如き岩二ツあり

遙に海を隔て、白^{ウツ}岳よくミゆる峯より雷雪の³²

如く煙り立登る晴天にハ後方羊蹄^{シリヘツ}山よく見ゆるといふ

ホロナイモクンヌイ川有此辺蛸崎佐左衛門土人^{アイノ}シヤクシヤイン

古戦場也クンヌイ川モヘツ此濱辺平沙にて道至而よろし

予馬上にて眠り催し真逆さまに落浪打際にて

した、か額を打始て目を覚しミれハ眉の上に團子

の如き瘤出たり馬ハ道の善悪にかゝわらず油断

すへからす長満部^{ラシヤマン}駅會所泊【自山越内^{ヤムクシナイ}九里三丁】此

宿内地^{シヤモ}日本^{日本}蝦夷^{エソ}

の堺也入口に土人^{アイノ}家多し門口に柴垣を結獸の首を

掛木幣^{エナラ}を建て祭祀なり生なるも有白骨もあり³³

【ウ・34 オ 挿絵・狂詩（略）】

至而見苦し、海辺よりレフンケ海岸絶壁見ゆる景色

よろし同七日中微雪卯上刻出立右ハ礼文記^{レフンケ}虻田^{アフタ}道也

左ハ黒松内^{クロマトマナイ}越山路六里にして西海岸歌棄^{ウタシツ}江^江出る

名にあふ難所也町はつれより葭谷地にて馬の腹まで

ぬかる【蝦夷馬の奇なるコト第一骨太く肉なく蹄高く宛山獸の如し

荊棘巖石のきらひなく駈行コト兎の如く川をわたり泥を踏道も

なき雪地を分け行ハ馬毛に氷つきて数十の鈴をかけたる如くカラック

と音

す也終日草を不食杳も不打していしか成難所も不厭日に二三拾里も駈行

也

実に名馬といへつへし軍馬にはかゝる

馬社「こそ」用ひたし」イヌ、シナイ二股^(フタマタ) 昼餉ヲサマ

ンへ川上を渡りユナヲ峠大木多^(ヨ、)し「櫓^(ナラ) イタヤの類也」篠原にて道極

あし、此辺を通る時土人三四人身に赤熊の皮を着し」^{34ウ}

足にケリをはき「鮭の皮^ニ而造る履也」手に鐐を持鮭魚を馬に

つけしか傍に坐し合掌礼拝す「土人^(アイノ)の辞」「ニシハ^(旦那)。メアン^{(サ}

ムイ)。シンキ^(コクロウ)。

言語一切不通馬士に問へハ「旦那様しはれる^(サムイ)に

大に御苦労と云コト也と」云土人^(アイノ)の音

聲魯西亜に似たりフナノキタイ黒松内^(クロマトマナイ) 泊「自長万部^(ヲサマン)」

五里」

于時申上刻也ク「^ルロマトマナイ川壽津^(スツ)」迄三里川舟あり

此節氷雪にて舟止る同八日雪降卯下刻出立クロ

マツナイ川を馬にて渉り左にカニカン岳見ゆるメツフ観音^(カンノ)

臺^(タイ) 茶屋有西海眼下ニ見ゆるこれより歌棄^(ウタシツ) まで

所々に家壺式軒ツ、有歌棄^(ウタシツ) 駅「自黒松内^(クロマツナイ) 四里半

戸百二十三」自是蝦^{35オ}

夷西岸にて荒海也運上家昼餉当地出張開拓役人^江

此度磯谷^(イソヤ) 請取のため出張之旨相届け少く休息し

申下刻出立雪霰^(アラ) れ風烈し右ハ氷岸左ハ萬里の

大洋シユマチセ棧道銚立岩景^(ケイ) 色いわん方なし

ユウキナイ此處歌棄^(ウタシツ) 磯谷^(イソヤ) 境なり運上家詰役人并

土人出迎ふ土人^(アイノ)の装束アツシの筒袍に木綿縫の

脚半をかけ鮭皮履^(ケリ)を踏狸々緋の陣羽織を着し

「紋ハ丸にツタなり」彼堺より先に立案内す其様古風を不失

甚感^(カン) 心也酉上刻磯谷^(イソヤ) 運上家^江 着す互に千里」^{35ウ}

海陸無難の怡を述る内いろククの役人目見す

終夜雪風不止波濤の聲にて不安眠「自歌棄^(ウタシツ)

一里十二丁」函館^(ハコタテ)より磯谷^(イソヤ) 迄三拾九里半」^{36オ}